

リンドレー・ウィリアムズ・ハブル・林秋石

Lindley Williams Hubbell Hayashi Shuseki

－人と作品－

The Man and his Works

尾崎 寔

OZAKI Makoto

Abstract : One morning in September 1953, an American poet left San Francisco on board a ship bound for Yokohama Japan. He had never been married, and no one was there to see him off. His mind was firmly set never to return to his home land. This was the time of McCarthyism in America. The poet's name was Lindley Williams Hubbell, born in 1901 in Hartford Connecticut. His mother was such an enthusiast of Shakespeare that he was led to read and see Shakespeare at the age of eight, and by the time he was ten he not only had read 37 plays and sonnets but memorized every line, every single word of them all. He was taught French, Italian and German not in school but by a cultured lady who lived next door. Receiving a Yale Younger Poets award in 1927, Hubbell distinguished himself in New York as a hopeful poet and then a good reviewer. His favorable comments about Gertrude Stein were one of the reasons she came to be accepted as the first rate poet from then on. In Japan he taught Shakespeare and English literature at Doshisha University, Kyoto University, Osaka University, and then at Mukogawa Women's University. In those 41 years in Japan, he saw more than 180 Nō dramas out of some 240 surviving works. The collection of his essays and poems, *The Works of Lindley Williams Hubbell*, was published after his death in 2002 by his former students and admirers (CD-ROM version 2005) from the Iris Press, Kyoto.

Keywords: Poet, Hubbell, Shuseki Hayashi, Shakespeare, Gertrude Stein, Nō drama, Doshisha, Ruth Sasaki, Hisao Kanaseki

詩人、ハブル、林秋石、シェイクスピア、ガートルード・スタイン、能、同志社、
ルース・ササキ、金関寿夫

その一 旅立ち

1953年9月のある朝、一人の詩人がサン・フランシスコから日本に向けて祖国アメリカを離れた。二度と帰ることはないかと深く心に決めての船出であった。

詩人の名はリンドレー・ウィリアムズ・ハブル(Lindley Williams Hubbell, 1901～1994)。やがて日本で、日本人林秋石として 93 年の生涯を閉じることになるハブルは、このとき 52 歳。彼が全作品を句読点にいたるまで記憶してしまうほどに愛したシェイクスピアが生涯を終えた年齢でもあった。いうならばそこで「一つの人生」を過ごした故国を離れるほどの意味があったはずだが、妻も子もなく、見送るものとなない静かな旅立ちであった。

彼は 1901 年コネティカット州ハートフォードで生まれた。この街は、「アメリカ民主主義の父」とも呼ばれる宣教師トーマス・フッカー(Thomas Hooker, 1586～1647)が、1636 年に拓いたもので、フッカー家とハブル家とは、リンドレーから数えて四代前、曾々祖父にあたるジョゼフ・ミドルブルック・ハブルと、曾々祖母ユーニス・フッカーとの結婚によって交わっている。

ニューイングランドにおけるハブル家の始祖リチャード・ハブル(Richard Hubball, 1625? ～1699) も、フッカーより少しおくれて (1640 年ごろ?)、イギリスから移住したピューリタンであり、ハブルは、アメリカ合衆国の主要な二つの源流の血を引いていることになる。この話をするたびに、彼は含み笑いをしながら、「なんという名前だろう!」(What the hell of a name!) とつぶやいたものだ。親しい人たちといるときに、さりげなく、しかし実に効果的に、タブーとされていた言葉を使うのは、彼のお得意技でもあった。いうまでもなく同じスペリングの「フッカー」は、アメリカの俗語でもっぱら「こそ泥、売春婦」の意味に用いられるからである。

リンドレーはリチャードから数えて十一代目にあたる。ハブル家は、現在ではアイオワ州ディモインに、充実したハブル・センター(<http://www.hubbell.org/hubcent.htm>)を有し、北米だけでなく、カナダ、英国にも支部をおく、いわゆる「ニューイングランド・ピューリタン」の正統派である。センターは 1980 年、1998 年には 1000 頁を越える一族の系譜¹を編纂、発行、版を重ねている。

系譜によれば、初代は三度の結婚によって 9 男 5 女に恵まれた子福者で、一門発展のいしずえとなった。

現在もなお地球の 600 キロ上空を回る衛星として活動をつづけているハッブル宇宙望遠鏡は、一門の誇りとする天文学者エドウィン・ハッブル (Edwin Powell Hubble, 1889～

¹ *History & Genealogy of the Hubbell Family*, ed. by H. B. Hubbell, Jr. and D. S. Hubbell, 1980, 1998.

1953) にちなんでも名づけられたものである²。2003年、アメリカ宇宙局 (NASA) は、打ち上げてから10年以上たち、巨額の修理費、経費を必要とするところから、いったんは廃棄を決めた。しかし、国内外からの存続を求める声におされ、2006年にいって、決定をくつがえし、スペース・シャトルを送って修理の上、2013年まで使用すると発表した。ハブル・ファミリーあがての運動が功を奏したという部分も大いにあったはずである。

ニューイングランドへ移る以前のハブル家は、イングランド中部のウースタシャー（現在ではウォリックシャー）のイプスレー (Ipsley) に住んでいたとされる。

ついでながら、筆者がこのことをハブル自身の口から聞いたのは、彼が亡くなる直前のことである。1994年の夏イギリスに出かけて、ロンドンのテムズ河ぞいに再建中のシェイクスピア・グローブ座を訪れた報告をしたところ、大変よろこび、

「私の先祖が住んでいたイプスレーは、ストラトフォード・アポン・エイボンから数マイルしか離れていない。きっとご先祖のだれかはシェイクスピアと会って、握手もしたはずだ。さあ、君と握手しよう」

そういって、手を差しのべたハブルの嬉しそうな表情が、記憶に残る最後の、かげりのない笑顔となった。

余談が長くなるが、このときのハブルとの会話がきっかけとなり、3年後完成した新しいグローブ座には、3カ所にハブルの名前が刻まれている。ひとつは劇場に入って右側、吹き抜けの二階廊下壁面に掲げられたパネルに並ぶ「千ポンド・クラブ」メンバーとして。アメリカ人俳優サム・ワナメーカー (Sam Wanamaker, 1919~93) が1971年から推進したグローブ座再建計画を支援するため、名優ジョン・ギールグッドを名誉会長としてスタートしたプログラムだが、一人千ポンドの寄付が条件で、千人限定の終身会員を募集するというものだった。英米はもちろん、世界中から演劇を愛する人たちが名を連ねているが、ハブルは500番目のメンバーにあたり、記念に特別なシャンペンがグローブ座から贈られた。偶然のことながら、ワナメーカーもハブル同様、50年代はじめのマッカーシズムを避けて英国に活躍の場を見つけたアメリカ人の一人だった。

二つ目は舞台に向かって右手、一階ギャラリー席木製ベンチで、ここにもハブルの英語フルネームが金文字で刻まれ、三つ目には、地下のシェイクスピア博物館に向かう階段左側の壁に、めずらしく毛筆で書いたハブル自筆のサインが、銅版に写し込まれている。

² 名前のスペリングについては 'Hubbell' が正しいが、エドウィンがそうであるように、'Hubble'、また始祖のリチャードは 'Hubball'、ほかにも、まれには 'Hubbel' 'Hubel' 'Huble' などのつづりを用いている例がある。

本題のハブル家にもどれば、一家は 11 世紀のドゥームズデイ・ブックに記載されているヒューバンド家(The Huband) にいたり、ノルマンの血を引いているというのが、現在定説とされているところである³。一説によると‘Huband’は、古代ドイツの‘Hugibald’につながり、その名前は‘mind-bold’を意味した、というのがおもしろい。もちろん、これらの記述の真偽をたしかめる用意も、その意図ももちあわせていないが、筆者はもとより、ハブルに身近に接したものの共通した印象のひとつに、彼の精神の強靱さがあるからだ。

ハブルは、ディモインのハブル・センターがこれらの情報や資料をまとめるより、ずっと以前、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーに司書として勤務していた時代に、ハブル家にかかわる情報を手に入れていたと思われる。しかし来日以来、名だたるアメリカ人のルーツ探し熱が生んだ「ホラ話」と見られることを嫌ってか、冗談めかした話しぶりでしか、まわりのものたちは聞かされていない。

さて、裕福な両親のおかげで、恵まれた幼年時代を過ごしたハブルは、さらに幸運なことに、生家の隣に住んでいた Laura Charlotte Williams から独、仏、伊語の手ほどきを受け、西欧文化の基礎についても教えられている。彼のミドルネーム Williams は、深く敬愛していた彼女からとったものである。ハブルは終生彼女を‘aunt’と呼び、慕っていた。

一方、幼いころからコンサート、オペラ、演劇など、機会のある限り足を向けることができたのは、彼女の影響だけでなく、演劇を愛した母親のおかげだったとのちに述べている。父親は退役陸軍大佐で、釣りや狩猟に熱中していて、息子にたいしてはまったくの放任主義だった。それだけに、小言ひとつ言うこともなく、ふんだんに小遣いを与えていたようである。

特筆しておかなければならないのは、母親がとりわけシェイクスピアを好み、連日のように劇場にハブルを連れて出かけていたこと。そのため、ハブルは 8 歳からはじまって、10 歳までには、当時ハートフォードの街で頻繁に上演されていたシェイクスピア劇をすべて観ているし、同時に全作品を読みおえたばかりか、全作品を記憶してしまっていたのである。

ハブルは 93 歳で亡くなるまで、毎年一回、全作品を読みかえすのを習慣にしていたし、その記憶は薄れることがなかった。もっとも、そのほとんどは「読む」のではなく、記憶のなかから甦らせるだけでよかったのである。視力をほとんど失ってからハブルを見舞ったときのこと、枕のそばにおかれたシェイクスピア全集を指さし、『タイタス・アンドロニカス』4 幕 2 場、タイタスのせりふを読むから聞いてほしいと言う。まったくテキ

³ Cf. P. H. Reaney, *Dictionary of British Surnames*, 1958, C. M. Mathews, *English Surnames*, 1969.

ストどおりなのに驚きながら、「そのとおり、間違いありません」と答えると、それはわかっていると言わんばかりに、「そのあとはコロんか、セミコロんか」という質問だった。

そのことに関して、彼が自慢げに語るのを直接聞いたことはなかったが、膨大な著作の中に一カ所、T. S. Eliot の言葉を借りて次のように言っている。

T. S. Eliot has said that to understand a play by Shakespeare one must have read all of Shakespeare. This is literally true.⁴

つまり「シェイクスピアの作品を理解しようと思えば、彼の作品を全部読まなければ」とエリオットが言っている、そのとおりだ、と書いていて、「全部覚えてしまわなければ」などとは言わない。エリオットですら、全部覚えていたはずはないのだ。そもそもシェイクスピア自身が、書いた作品を全部覚えていたなどとは思えないでないか。日本人であればなおさら、ふつうは、全部読むことすら、むずかしい。全訳を完成させた坪内逍遙、小田島雄志、などは数少ない例だろう。

もうひとつ、ハブルがこのことに触れた資料がある。友人から求められ「楽しい話」「意義深い話」に次いで「ひどい思いをさせられた話」(vexing)として語っているエピソードがそれである。登場するのは京都でハブルから強い影響を受け、帰国してから名をあげたアメリカ人の現代美術家ジム・バイヤーズである。⁵

Ever since I was a little boy I have known	小さいころからずっと、シェイクスピアの台詞
hundreds and hundreds of lines of Shakespeare	はいやというほど覚えていたから、シェイクス
by heart and in my Shakespeare classes I never	ピアの授業で台詞を読むのに、テキストはまっ
have to use a book when I read it with them.	たく必要なかった

Jim used to attend my Shakespeare course and	ジムはシェイクスピアの授業によく出席してい
when I would say Shakespeare he would stare	て、私が台詞を口にすると、きまってじっと私
at me so intensely that it was very disconcerting.	をにらみつけるので、どぎまぎさせられた。
Finally one day he stared at me so wildly that	とうとうある日、襲いかからんばかりに見つめ
I completely forgot what I was saying. It was	るものだから、しゃべっていた台詞を全部忘れ
the first time in my life I ever forgot a word of	てしまった。シェイクスピアを一言なりと忘れ
Shakespeare.	るなんて、生まれて初めてのことだった

⁴ Hubbell, L. W., *Studies in English Literature*, Preface, Yamaguchi Shoten, 1982.

⁵ James Lee Byars, 1932—1997)。1958 年来日、10 年間京都に住み、同志社大学、YMCA などでは英語を教えるかたわら、観衆との交流やパフォーマンスを組み入れた活動をつづけた。同志社ではハブルの授業にも出席し、思想的に大きな影響を受けている。モダン・アーツに対する関心が二人を結びつけ、ジムが帰国してアメリカで高い評価を受けるようになってからも交友はつづいた。

After the class Haru-chan said, I never thought I'd see you forget Shakespeare. 授業のあとハルちゃんが言った。「先生がシェイクスピアを忘れるなんて、思ってもみなかった」

It was that son of a bitch Jim Byars, I said. あの野郎、ジム・バイヤーズのせいだ、と私

さて、ハブルとシェイクスピアの記憶については最後に、ハブルが息を引き取る数時間前にもらしたといわれる言葉を記しておこう。

私はもうだめだ、シェイクスピアの言葉が出てこなくなった。歴代天皇のお名前も

ヨーロッパの主要言語を自由にあやつった彼にして、なお日本語は「習得不可能」と言わせた⁶ ものだが、その日本の神武以来平成にいたる天皇の名前を、読みだけとはいえ、深い畏敬の念をもって全部そらんじていたのである。戦後生まれの日本人で「神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭・・・」と、125代にわたって暗誦できるものが何人いるだろうか。

価値のあることばや事柄をメモに頼るのではなく、覚えてしまうということにかけて、ハブルが超人的な能力を備えていたことは疑いない。しかしそれは彼にとって、生きることそのものを意味していたのではないかとさえ思われる。最晩年、ほとんど寝たきりの状態でなお、視力の衰えを嘆きながら、あらたにディッキンソンの詩を覚えはじめた、もう30編は頭に入ったといって、見舞いに訪れた弟子たちを驚かせたものである。彼の詩のなかに *Waka* と題する作品がある。⁷

I am not a person.	私は一人の人間ではない
I am a succession of persons	記憶によってつなぎ合わされた
Held together by memory.	人と人との連続なのだ

When the string breaks,	つなぎとめている糸が千切れれば
The beads scatter.	ビーズはばらばらになる

⁶ 英語なら26文字知っていれば、幼子でもシェイクスピアを「意味」はともかく、「読む」ことができる。日本語は漢字を知らなければ古典を読めないだろう、と言って、「いったい漢字はいくつあるのだ」とこだわりつづけた。実はきれいな日本語を話したという、英語を話す弟子たちに一度も見せたことのなかった一面についての証言もある。このことについては後述。

⁷ ハブルの作品は、限られた例をのぞいて、日本語には訳されていない。詩は翻訳不可能という建前に、すくなくとも韻律に関するかぎり異論はない。ただ、やさしい言葉で書かれてはいるが、訳がほしいという声も寄せられているので、本稿では原則として日本語訳をつけている。あくまで意を伝えるための本稿筆者による便宜的な試訳である。

のちに彼にとって、もっとも重要な作家 5 人はと問われ、その筆頭にシェイクスピアを挙げているのは、それが自己の存在確認の中核にあったと考えれば、当然のことだっただろう。ちなみに、あとにつづくのはイプセンであり、ホメロス、エミリー・ディッキンソン、ガートルード・スタインであった。

高校は母親のすすめもあり、2 年で中退。彼女の芝居好きも徹底していて、当時俳優ロバート・マンテル (Robert Mantell, 1854~1928) が街にやってきたときには、観劇のため息子に一週間学校を休ませて、校長、教師を逆上させている。呼び出しを受けた母親の答えは、「この子には、ここにくるより、シェイクスピアを観るほうがずっと大事なのです」。大学での教育を経験しなかったことはいうまでもない。

その後「伯母」の影響のもと、古代から現代にいたる文学・哲学・美術・音楽・歴史など、幅広い知識を独学で養い、理解を深めている。

1925 年から、New York Public Library に勤務、ハートフォード時代からはじめていた詩作は、司書としての仕事のかたわら続けていて、1927 年には最初の詩集 *Dark Pavilion* が、イェール新人詩人賞を得て出版された。1931 年、*The Tracing of a Portal* 1938 年、*Winter Burning* と、寡作ではあるが、いずれもすぐれた詩集を発表している。深い西欧的な素養にうらづけられたこれらの作品は、文壇でも高い評価を得て、書評も書くようになり、エズラ・パウンドをふくめ、当時の代表的詩人たちとの交流がはじまった。

彼の好意的な書評が、スタインのその後の確固たる名声につながるきっかけとなったいきさつは、日本におけるもっとも忠実な弟子の一人であり、誠実な出版者でもあった Yoko Danno のインタビューに答えて、彼自身が独特のユーモアを交えながら語っている。⁸

スタインとハブルの交友は、それ自体 20 世紀文壇史の価値ある一ページというべきだが、二人の間の往復書簡は、現在イェール大学のレアード・ブック・ライブラリーの「ガートルード・スタイン・コレクション」にすべて収められている。

1946 年、20 年におよぶニューヨークでの生活に終止符をうち、故郷ハートフォードにもどったハブルは、Randall School of Arts の教壇に立つ。そこでの数年間は、第二次大戦後の、アメリカがもっとも自信と活気に満ちあふれていた時期であり、それだけに俗悪なものが横行し、磨きぬかれたハブルの感性からすれば、およそ堪えがたいものであっただろうと想像できる。30 年後に書いた「自伝—50 の文章による」(*Autobiography in fifty sentences*, The Ikuta Press, 1975) を読むと、彼一流のユーモアに包まれてはいるが、日本でのおだやかな風貌からは想像しにくい厳しさを感じさせられる。

⁸ *An Interview by Yoko Danno, At Kunishima Hospital, Kyoto, January 31, 1994, dedicated to him in Autumn Stone in the Woods*, ed. by David Burleigh & Hiroaki Sato, P.S., A Press, 1997

24. My family was refined we never said shit, we said Number Two.
うちの家族は上品だったから「シット」なんて口にしなかった。「ナンバー2」。⁹
25. From 1946 to 1953 I lived in Hartford, Connecticut.
26. Number Two on Hartford, Connecticut.
27. I left Hartford forever on August 20, 1953.
28. “Vomitting out of the train window,” to quote Stephanie Terenzio.¹⁰
ステファニー・テレンチオの表現を借りるなら、「列車の窓からもどしながら」

その二 1953 年

ハブルがニューヨークを拠点とし、詩人としての評価も確立していたアメリカを、なぜこのようなかたちで去らなければならなかったのか。東洋、とりわけ日本の文化についての理解や憧憬があったことはたしかだが、のちに、もしこのときイタリーに仕事があれば、行っていたらと言っているところを見ると、なにはともあれ、「アメリカを去る」ことが重要だったとしか思えない。

そのことを考える前に、この 1953 年という年に目を向けてみよう。

この年、世界的に大きな出来事が相ついでいて、それらをつなぎ合わせていくと、一個人の人生を越えた大きな意味が浮かび上がってくる。そのいくつかは、ハブルにとっても、その後の人生を大きく左右することになる。

3 月 5 日、旧ソビエト連邦首相兼共産党書記長スターリン (73) の死亡が発表される。日本でも東京証券取引市場がすばやく反応し、軍需関連株を中心に大暴落がおこった。これは彼の死をきっかけとして、ソ連が政策を転換、東西冷戦の時代が終わり、平和が到来するのではないかと予想されたためだった。悲しいことに、お金は戦争が大好きなのだ。

後任のマレンコフ首相は、紛争の平和的解決を強調し、7 月に朝鮮での休戦協定に調印する。

11 月 15 日、ニクソン米副大統領が戦後初の国賓として来日し、19 日には日米協会で「憲法 9 条はアメリカの誤りであり、保安隊の増強を援助する」と演説している。これを受けて日本は翌年、防衛庁設置法と自衛隊法を公布し、再軍備を本格化させていく。

二極対立の一方が平和を求めはじめていくというときにである。

⁹ ちなみに「ナンバー・ワン」は、小児語で「おしっこ」。

¹⁰ Stephanie Terenzio is the former Assistant Director and Curator of 20th-Century Art of the University of Connecticut's William Benton Museum of Art.

ハブルが積極的に政治的な活動にかかわったという形跡はどこにも見当たらない。しかしこの年、祖国を離れ、日本ででの生活をはじめたころの詩のなかには、読むものをたじろがせるような激しい感情が噴き出している。『旅日記—1953～1954』(*Travel Diary 1953～1954*) がそれであるが、これについてはすこし、説明しておきたい。

この作品が陽の目をみたのは2002年、ハブルの詩、エッセイをまとめた1400ページにおよぶ著作集が完成した直後のことである。

厳密には、未刊の原稿というべきかもしれない。ハブル自身がタイプライターで打った30ページの詩集だが、明らかにプロの手による立派な製本で、わずか厚さ4ミリの背中に金文字で TRAVEL DIARY HUBBELL と打ち込まれている。扉には 'To Manji from Lindley' Feb. 25, 1956 と献呈の文字がハブルの手で記されている。まだ「林秋石」の名前は生まれていない。

ハブルが日本に帰化しようと決意したのは来日直後のことだったが、法律によって5年間待たねばならず、結局正式に国籍が取得できたのは1960年のことであった。そのときに日本名を「林秋石」としている。「林」はリンドレーの「リン」に漢字をあてたもの、名前については、相談を受けた日本人に「四季のうちで一番好きなのは？」とたずねられ、「秋」と答えて決まったという。英語に訳せば 'Autumn Stone in the Woods' となり、これは彼の没後、弟子や友人たちが編んだ追悼集¹¹ のタイトルにも使われている。

TRAVEL DIARYにもどろう。献呈を受けたのは元神戸大学教授小林萬治で、56年2月といえばハブルが同志社大学英文学科教授に就任して2年目の授業が終わったところである。当時学生として在籍し、同志社英文の黄金期をささえた小林をはじめとする感性豊かな若者たちが、固有名詞で登場しているのは、52歳からまったく新しい環境、人間関係の中での生活をはじめたハブルにとって、彼らがどれほど大きな心の安らぎをもたらしていたかを物語っている。

この詩集に収められた詩のうちのあるものは1965年、アメリカで出版された *Seventy Poems* (Alan Swallow, Denver) に収められているので、当然原稿は手元に残されていたわけだ。しかしここでしか見られない作品にこそ、祖国にたいする生々しい感情と、日本を見る澄み切った目のコントラストが鮮やかで、今となっては特別な意味を持つことになっているといえるだろう。

内容の一部を紹介しよう。1ページに1編の詩、全部で28編という構成で、冒頭におかれているのが「ハートフォードを離れる」(Leaving Hartford)と題する詩である。

¹¹ *Ed. by David Burleigh & Hiroaki Sato, 1997.*

I shake the dust of this city
 From my shoes.
 I pronounce Anathema
 On the people of this city

この街のほこりを
 靴の底から払い落とし、
 この街の連中に
 私は毒づく

Because, being insensitive
 And without imagination,
 They expected me to explain to them
 The art of poetry.

なにしろ、鈍感なうえに
 想像力も持ちあわせてないものだから
 連中は、私が詩のなんたるかを
 説明してくれると思っていたのだ

ハブルが祖国アメリカとの別れを決然と表明しているのは、6 番目の「ホノルルを離れる」(Leaving Honolulu)である。

As I leave American soil
 I have this to say to my countrymen:

アメリカの大地に別れを告げるにあたり
 これだけは同胞の君たちに言っておきたい

You are the only people in the world
 who have never lost a war.

君たちは世界で唯一
 戦争に負けたことのない国民だ

You are the richest people in the world
 and the luckiest.

君たちは世界一裕福で、
 世界一運のいい国民だ

From anyone else I could take
 prejudice and ignorance and vulgarity

偏見、無知、下品さ、そんなものを
 だれが持ちあわせていてもかまわない

but not from you,
 you pousy bastards. Aloha.

だが、君たちには許せない
 この、金の亡者たち アロハ

ハブルの、祖国にたいする深い絶望感の背後に、上記の詩にみられるようなアメリカ人の偏見、無知、下品さがあつたことは疑いようもない。戦争という愚行をうながし、それを推進するエネルギー源として利用するため、そのシンボルに掲げられたのが「反共主義」であつたことも今では否定できない。いわゆる「マッカーシズム」である。

ハブル自身がジョゼフ・マッカーシー上院議員 (Senator Joseph Raymond McCarthy, 1908～1957) 率いる「非米活動委員会」の標的にあげられたというわけではない。しかし、

ひたすら精神の自由を求めたハブルが、不寛容で、狭量な人たちのなかで、どれほど息苦しい思いをしたかは、容易に想像できる。

その点で、筆者には忘れられない記憶がある。

‘Welcome back to civilization!’（文明社会によろこそお帰り！）

これは1966年から一年間、はじめてのアメリカ暮らしを終えて帰国し、あいさつに訪れたとき、両手を広げて迎えてくれたハブルの口から出た言葉である。貧しい一介の留学生が、短い滞在を通じて、アメリカ社会の政治的な偏りを実感できるわけもなく、その一言の重みは、与えられたときよりも日が経つにつれて大きくなっていったことを告白しなければならない。しかもこの言葉にもうひとつの意味があったことを知ったのは、つい最近のこと、彼が友人にあてた手紙によってである。

You don't say Okaerinasai in English. Foreigners have no manners.¹²

英語では、お帰りなさい、などと言わない。外国人は行儀を知らないんだよ。

ハブルが日本国籍をとってから8年、日本人であることに大きなやすらぎを見出したころの手紙である。1953年来日時彼の不安とのコントラストを見ることができるだろう。

1940年代後半から50年代にかけてアメリカ社会に吹き荒れた「反共主義」の嵐、いわゆるマッカーシズムについては説明するまでもないが、映画 *‘Good Night, and Good Luck.’*¹³ がドラマティックに描いて見せたように、1954年3月から4月にかけて、テレビというまだ新しいメディアを使って、マッカーシーと、彼に批判を浴びせたジャーナリスト、エド・マロー（Edward R. Murrow, 1908～1965）が対決、明らかにこのときを境に流れが変わった。とくに第一弾となった3月9日の放送は、アメリカ全土で4000万人が見たといわれる。それで勝敗が決せられるというほど単純なものでなかったことはいうまでもないが、アメリカの良識を沈黙させてきた「赤狩り」の猛威に、政治家ではなく、勇気あるジャーナリストが立ち向かい、食い止めるきっかけをつくったところに意味がある。

この歴史的な事件については、すでに数多くの研究が発表されているが、日本ではマローの功績だけでなく、非難されるような側面まで丹念に探った田草川弘の『ニュースキャ

¹² A letter to Yoko Danno, April 17, 1968.

¹³ 製作アメリカ、2005年。93分。第78回アカデミー賞6部門にノミネートされたほか、世界各国の映画祭で多くの賞を獲得。DVD版で入手可能。

スター』¹⁴ が群を抜いている。

つまりハブルが祖国を離れる決意を固めたのは、「自由の国」アメリカが、かつて経験したこともないほど不寛容な状況にあった時期と重なる。いうまでもなく、戦争はその後もつづけられ、いまだに泥沼から脱してはいないが、マッカーシーとエド・マローとの対決を頂点として、思想の自由回復にむけて米国社会の潮流が変わる大きな分岐点の直前にあったことは疑いない。

先に述べたことだが、ロンドンのグローブ座再建を推進したサム・ワナメーカーも、1952年、映画の歴史に残る「ハリウッド・テン」の一人、エドワード・ドミトリクが演出したロンドンの舞台に出演していて、帰国すればマッカーシーの非米活動委員会への召喚が決まっていた。それを避けてロンドンにとどまったことから、サムのイギリスでの活動がはじまっている。いってみれば、シェイクスピアの新グローブ座が実現した背後に、ハブルをして祖国を捨てさせたのと同じ理不尽な力が働いていたことになる。

対象が自分の貧しい理解力を越えるとき、わかりやすいレッテルをはってゴミ箱に直行させる、というのは凡人にとって生きる知恵でもある。それは差別の根源となる。ハブルが終の棲家と定めた京都においてすら、彼が生涯独身であったことをとらえ、「ホモ」なのだ、とか、「あの頭のよさはユダヤ人」といった心ないうわさは、何度か聞かされたものである。その当時から笑うしかなかった妄言の一つに「ただのディレタント」というのもあった。今思えば、そんな噂をふれまわったり、したり顔に評するしかなかった人たちの感性の限界に、いつそ衰れを覚えてしまう。

いずれにしろ 50 年代初頭のアメリカが、精神的スケールの大きなものに、喉もとをしめあげるような圧力を感じさせていたことは間違いない。

ルース・ササキ (Ruth Fuller Sasaki, 1893~1967)

1925 年以来 21 年間つとめたニューヨーク・パブリック・ライブラリーを辞したハブルは、1946 年からハートフォードに新設されるランドル・スクール・オブ・アーツ(Randall School of Arts)に招かれ、ギリシャ劇から、シェイクスピア、イブセンにいたる演劇論を講じた。1953 年というのは、上に述べたような社会の大きなうねりと無関係ではありえないが、ランドル校が閉鎖されることが決まった年でもあった。

日本の大学で教えるつもりはないかという、ニューヨークの友人ルース・ササキからの手紙は、まさに渡りに舟であり、すぐに承諾の意を伝えたのだが、つづいて届いたのは、

¹⁴ 田草川弘、中公新書、1991 年。著者は、1934 年生まれ、20 世紀後半のアメリカ社会をリアルタイムでとらえ、なお客観的に見なおすジャーナリストの目をもっているという有利さがある。

予定していた大阪の公立大学が、突然、採用中止を通知してきたという知らせだった。

「アメリカ仏教の母」と呼ばれるルース・ササキについて、多くを語る必要はないだろうが、外国人としても、女性としても初の禅僧として日本で得度を受けた彼女が、当時ニューヨークに日本人の夫と開いていた禅道場と、資料整理や研修のための拠点としていた京都大徳寺との間を行き来していなければ、ハブルの来日はおそらくなかったと思われる。もっとも、ハブルの東洋思想、なかでも仏教に対する関心と理解は、来日以前、若いころから培われてきたものだった。

しかし、就職のあてもないまま、自費で京都に来てしまったハブルにたいして彼女に出来たことは、自分が進めていた資料整理、翻訳の手伝いをさせるくらいで、ハブルの失望は大きかった。

金関寿夫（1918～1996）

京都で彼女を助けていたスタッフの一人に、同志社大学英文科出身の金関寿夫がいた。もともとハブルを招きたいという申し入れは、彼がつとめていた大学からのものであったことから、ルースはハブルが京都にやってくるなり、二人を引き合わせ、夕食をともにしている。ルースとハブルのつながりが、このときでほとんど終わったのにひきかえ、初対面だった金関とはその後、さらに親交を深め、生涯にわたり‘Shu-chan’ ‘Hisao’と呼びあうような深い友情と信頼で結ばれている。¹⁵

ハブルは最晩年、京都の西賀茂にあった国嶋病院に入院していたが、死後、親しかったもの数人が集まり、入院中もそのまま契約していたマンションの整理をした。そのさいの金関のつぶやきを忘れることができない。

「彼はぼくらの良心だったな」

金関自身の死が伝えられたのはそれから間もなくのことだった。

本題にもどろう。

日米開戦の1941年、同志社大学英文学科を卒業した20人のなかでも、ひときわ抜きん

¹⁵ ハベルにとって生涯憧憬の的でありつづけたのは、イタリア生まれの舞台女優 Eleonora Duse (1858～1924) であったが、彼女について高く評価していたのがフランスの女優 Sarah Bernhardt (1844～1923) である。ハベルの遺品のなかに、ベルナールの伝記 *Madame Sarah* (Cornelia O. Skinner, 1966) があった。1967年、ハベルの誕生祝いにニューヨークにいた金関が贈ったもので、扉に ‘For Shu-chan, On his birthday in 1967 June 3rd with love, Hisao and Kuniko in New York’ と記されている。

でていた金関のその後の活躍については、ここでは割愛するしかないが、彼はすぐにハブルを母校同志社英文の中心にいた上野直蔵に紹介した。

先にあげた Yoko Danno のインタビューによれば、ハブルが横浜港に着いたのが 10 月 6 日、上野、ハブル、金関が昼食をともにしたのが 10 月 9 日と、時間的に切迫しているが、横浜では数日友人とすごしたとも言っており、京都ではまず駅に出迎えたルース・ササキから金関にも紹介され、夕食に招待されているわけで、新幹線もない時代、いささか時間的に無理があるように思われる。上野とののはじめての会合については若干の日時のずれがあるかもしれない。

上野は、戦中、英文学科が厳しい軍部の締めつけによって文化学科の一専攻となり、ついには専攻名さえも抹消されるなか、わずかに残った学生を相手に一人学科を支えぬいた。戦後、いちはやく新制大学として目ざましい発展を遂げる同志社の中核となったことはいうまでもない。上野自身、だれもが認めることだが、並みはずれた記憶力を誇っており、戦前、シカゴ大学で二年間にわたってチョーサー研究に没頭したこともあって、ハブルとは無言のうちに通じるものがあっただろう。ひたすら英文学科の充実発展に心を砕いていた上野が、会うなり、ぜひとも同志社にと考えたのは、まったく不思議なことではない。

だが、その前に大きな難問が待っていた。ハブルがいかに優れた詩人で、英文学について深く広い知識を持ちあわせているかは、紹介者の金関にたいする信頼もあって、上野には十分理解できただろう。しかも彼は英文学科だけでなく大学全体の運営に、現在では想像もつかないほど大きな責任と発言力を持っていたはずである。それでいてなお、わずか半年後の 1954 年 4 月から、英文学科正教授として迎える手続きを進めるにあたって、大きな障害となったのは、ハブルに詩集以外、一冊の著書も、一本の学術論文もなかったことである。

—文中敬称略（未完）

お断り

本稿執筆にあたって、多くの方々から貴重な資料を提供していただいた。それと同時に、ぜひとも書き上げてほしいという励ましのお言葉も届く。最後にまとめて、感謝とともに依拠した資料の詳細を明らかにしたい。誤りや追加すべき資料があった場合、下記あてご教示いただければ幸いである。

Ozaki Makoto <veg00441@nifty.com>